

## ④ Vのその歌

わしは大きな、大きなくすのきじや。みきの回りが十三・五メートルもあってな、子どもが十人手をつないでも、まだ足りんぐらい太いんじやぞ。高さは、二十メートルを少しこえているかな。ちようど、わしの目の前に、小学校があつてのう、その三階の教室を見おろすくらい高いんじや。年はな、はつきりとはわからんが、もう四百才はゆうにこえているかな。これから話をするこは、そう、実際にあつたことなんじや。わしはずつと見とつたんじや。

あれは、二月の寒いころじやつた。鳥もめつたに休みには来ないが、その日にかぎつて、一羽のはとが飛んで来たんじや。

わしのかたの上<sup>うへ</sup>に止<sup>と</sup>ま<sup>つ</sup>つてのう、しばらくして気が付いたんじやが、そのはとは、ちよつと様子<sup>ようす</sup>がおかしいんじや。バタバタ羽<sup>はね</sup>を動<sup>うご</sup>かしてはいるが、二十センチメートルぐらいしか飛<sup>と</sup>ぶことができないんじや。よく見ると、足につり糸がついていて、それがわしの体<sup>てい</sup>にからまって、もがけばもがくほど、がんじがらめになつていったんじや。わしにはどうもできんかつた。一日<sup>いちにち</sup>たち、二日<sup>ふたにち</sup>たち、はとはバタバタもがくばかりじゃつた。

「あつ、あそこで、はとがバタバタしている。」

「先生、はとの足にひもがついている。」

という子どもの声が聞こえてきたんじやが、どうもできんかつた。

三日<sup>さんにち</sup>たち、四日<sup>よにち</sup>たち、五日<sup>ごにち</sup>たち、その間、子どもたちは石をくくりつけたロープを投<sup>な</sup>げて枝<sup>えだ</sup>にかけようとしたり、長いさおを三階<sup>さんかい</sup>のベランダからさしたりしておつたが、とうてい無理<sup>むり</sup>じゃつた。



とうとう、七日がたった。その日は、みぞれまじりの寒い日じゃった。はとは、もうバタつくことはなかった。じっと、目をつぶっておるばかりじゃ。はとは、まるで自分のさいごを感じとっているかのようにやった。子どもたちは、大ぜい、わしのまわりに集まって、もう夕方五時を過ぎているといふのに、だあれも帰ろうともしない。

「おい、みんなで校長先生のところへ行つて、助けてもらおうよう、お願いに行こう。」

「そうだ、何かいい知えがあるかもしれぬ。」

わしは、子どもたちの目が、真けんさでうるんでおつたのを、今でもはっきりと覚えておる。みんな、がんばれと、言いたいくらいだったよ。子どもの一だんが消え、しばらくして、鉄工所のクレーン車がやって来たんじゃ。その後ろには、子どもたちはもちろん、先生や近所の人まで、大ぜいの人がついてきておつたんじゃ。わしには子どもたちの気持

ちはようわかっておった。しばらくして、ウイーンという音とともに、人を乗せたドラムかんが、わしの顔の方に向かかって上がって来たんじやが、下からのライトのせいかも知れんが、目がうるんで、はつきりとは見えんかった。

「いたい！」

とつぜん、ポキリという音とともに、わしの体にいたみが走ったんじや。その人は、わしの枝を折ったのう、はどの足からつり糸をとってやったんじや。わしは、じつとこらえながら見守っておった。下からもいくつもの目が、じつと見上げておった。そして、そつとはとを空へ放してやると、ふらつきながらも飛び去っていった。と、そのとたん、「わっー」というかん声とともに、大きなはく手がわいたんじや。わしは、この時ほど、みんなと心が一つになったと感じたときはなかった。

という話じゃ。今でもはつきりと覚えておる。えっ、わしはどこに  
るんじやって、知らんかのう。かつらぎ町の笠田かせだ小学校のうらの十五じごせ社  
の森に立つとるじやろうが。わしは有名人ゆうめいなんじや。県から天然記念物てんねんきねんぶつ  
として、指定していされておるんじやぞ。和歌山県  
はもちろん、近畿きんき地方では、わしに勝かつもの  
はだあれもおらん。全国ぜんこくでも、ゆびおりの  
大木たいぼくなんじや。とても大きいからわしを見上  
げると、きつとびっくりするぞ。国道から  
だって、校舎こうしゃの上のぞいでいるわしの顔が  
見えるんじや。

近くを通つたら、車のまどからでも見てご  
らん。



十五社のくすのき